

六、講　　演

ハレー彗星を見た話

（昭和六十年三月一日、神奈川県立希望丘高校の卒業式において）

御卒業お目出とう。私は懐しい母校の後輩諸君の前途を祝して、お話する機会を得ましたことを非常に光栄に思っております。

私の本日のお話は、私が明治四十三年四月、神中の二年生の一学期に見たハレー彗星についてであります。

私はサイエンティストではありませんからこの彗星について科学的な説明は出来ません。ただ、当時十四歳の少年が伊勢佐木町の実家の三階の手すりにもたれて、それを見たというだけのことです。然し来年三月もう一度見れるかも知れない。否、もう一度見たいという願望を抱くようになった現在、いろんなことが回想される。「桜蔭会報」に寄稿しました「ハレー彗星をもう一度」をお読み下さった方はその

一端がお分かりになったと思う。昔から人間の運勢と星とを結びつけた慣習が占星術（アストロロジー）となり、また、それが天文学（アストロノミー）に発展したことは御存知でしょうが、古来彗星の出現は天変地異の前触れとして、忌み嫌ったものです。俗に彗星といわれる彗星は長い髪の毛の空飛ぶ魔女と呼ばれ、戦争とか、地震とか、飢饉の前兆とされたものです。

私は西暦一八九六年、つまり、明治二十九年四月四日生れで、十九世紀の生き残りの一人です。御承知のように、明治時代には日清・日露の戦争がありました。これは、一八九四～五年と一九〇四～五年で、大体十年の間隔を置いています。先程申し上げました一九一〇年、ハレー彗星出現の前夜ということになり、私が神中を卒業した大正三年の七月に世界第一次大戦が勃発しました。一九一四年です。日露戦争から約十年後ということになります。それに一九二三年には御存知関東大震災がありました。これまた第一次世界大戦から約十年後ということになる。

過去の戦争が十年を周期として起っていることも妙ですね。

周期と云えば、ハレー彗星は、七十六年を周期として、この地球上から観ること

が出来ます。太陽、地球間の距離の三十五倍という遠距離へ行って楕円軌道に戻って来るのです。ですから二度これを見るためには、尠くとも八十五歳以上の天寿に恵まれねばなりません。私も、ですから、来年は九十歳になります。

天の川を隔てて年に一度の逢瀬を楽しむ牽牛織女に比べたら私共はハレー彗星に
対面するために七十六年待たなければなりません。私のハレー彗星をもう一度とい
う気持がお分かりでしょう。

ところが、ハレー彗星の現れた二度のチャンス、つまり、一八三五年と一九一〇
年の二度の機会を逸した十九世紀の二大文豪、『トム・ソーヤの冒険』でお馴染な
ヒュウモリスト米国のマーク・トウェインとロシアの最も偉大な小説家で、人道主
義者、レフ・トルストイについて簡単に述べてみたい。

マーク・トウェインは一八三五年に生れ、一九一〇年に死んだ。一八三五年は、
彼が生れたばかりの赤児だったから、当然ですが、一九一〇年には、その二年前か
ら已に病床に横たわっていたので、これまた見る機会を逸した。

トルストイは、一八三五年には、彼の八歳の時でしたが、この年に父の伯爵が歿

したので恐らくハレー彗星は見れなかったでしょう。しかもロシアの辺鄙なツौरアのヤスナヤ・ポリャーナというところだったから。

トルストイは、その後、青年時代に、陸軍砲兵中尉として、例のクリミア戦争に参加してセバストポールの如き体験談を初めとして『戦争と平和』という大作を以て世界的文豪となり、大正の初期に、わが国の津々浦々で歌われたあの「カチューシャ可愛や」の歌は、当時のロシア貴族の墮落を物語る『復活』（レザレクシヨン）という大作である。

尚、彼が貧しい農民を解放せんとして所有地を分譲した人道主義的行動は、わが白樺派の有島武郎に影響したことは御存知でしょう。

最後に、このハレー彗星について科学的説明を求める方は、岩波新書二〇七番、斎藤国治さんのお書きになった『星の古記録』並に日本ハレー協会の公式ガイドブックの『今日はハレーです』をお読み頂き度い。尚、「星の伝説」ともいふべき文学的な研究を知りたい方は、野尻正英（抱影と号す）さんの作品などをお読み下さい。野尻さんは神中の大先輩で、第二回の卒業生です。私にとりましては、早大英

文の先輩でもありますが、一度もお目にかかったことはありません。

ところで、野尻さんは、あの有名な小説家大仏次郎さんのお兄さんです。

最後に、私は米蘇の二大文豪が二度の機会を逸したハレー彗星との対面を来年は実現出来ることを念願しております。それも上よりのお恵みによって九十歳の長寿を頂けるか如何かが先ず問題です。

私はこの話を終るに当り、諸君が、呉々も御健康を大切になさって、来年の三月には是非ハレー彗星を観て頂き度い。

更に欲を云えば、来る二十一世紀になって、つまり、二〇六一年に、もう一度ハレー彗星を見て頂き度い。

(四) シドニー紀行

(昭和六十一年四月二十三日煙洲会において)

生涯において、七十六年振りに見る機会が与えられるハレー彗星と再会出来たことは、全く上よりのお恵みに外なりません。

こうした稀な幸運を有難く存じますと共に、これから会員の皆様に、その御報告を申し上げる機会を得ましたことを非常に光榮と存じます。

そもそも、私がハレー彗星を観測するためにシドニー行きを決意したのは、一昨年四月二十五日、皆様が、この不肖私の米寿をお祝い下さると共に、拙著『煙洲先生と横浜』の出版記念の会をお催し下さったその日であります。

偶々、当日の午前七時四十分、TBSのラジオ放送で、日本ハレー協会の会員募集の宣伝中、横浜に当年八十八歳の老人で、一九一〇年にハレー彗星を観た人がいると云って紹介され、私の体験談が僅か二、三分位でしたが電波に乗りました。そのとき、一体誰が私のことを話したのだろうか？ と、いぶかりましたが、先程申し

上げました四月二十五日の午後四時から催されました煙洲会でその謎がとけました。それは昭七会の石川久能君であります。

石川君を初め多くの方々の熱心な応援と激励とによりまして、シドニー行きを決意しました。

ここで改めて本会代表の菅さん初め会員の皆様に心から御礼申し上げます。

三月二十七日午後三時、横浜ターミナルから娘二人と孫娘二人を同伴して、同勢五名で出発しました。この度の旅行は、近畿日本ツーリストの企画によるもので、その入会手続など一切はその孫の一人がやって呉れました。

自分のパスポートは五月一杯で切れるので、更新の必要上、旅券申請のため自身で山下町まで出かけました。億劫とは思いましたが、これで、もう二、三度は海外旅行が出来ると思います、若返った気持ちになりました。

午後八時半のカンタス (Qantas) 機で成田を出発、翌朝六時シドニー空港着、途中平穏な航路に、機内のサービスも万点で、充分の仮眠をとることが出来ました。空港には長女恵美子の友人で、オーストラリアの初老の御婦人と山村夫妻とが出

迎えに見えました。因にオーストラリアの御婦人というのは、恵美子が五カ年の米
国留学を終えて氷川丸で帰国の途中、知り合いになった方で、以来、文通を続けて
いるマデリンさんという方で、現在はシドニーの舞台やCMで活躍している方です。
山村夫人は横浜湾岸教会の会員で、御主人はシドニーの商社で御活躍になっている
方です。

三月二十八日、午前中休養の後、午後はシドニーの市内観光。

シドニーは実に美しい都会で、海と背後の小高い丘陵との調和は一幅の絵です。
それに紅色の屋根が印象的で、郊外にまでずっと続く紅瓦べにがわらの連続模様とこの土地特
有のユーカリの並樹が良く調和している。

こうした紅い屋根を見た時に、直ぐ私はイギリスの中部地方の田園を思い出しま
した。

これは、全くイギリスの植民地だ。日本の国土の二十一倍もある広大な土地は、
御承知の通り、罪を問われて国外追放になった囚人達の汗と涙を以て開拓されたと
ころである。

私は中学の二年生頃、当時、英語のテキストとして使用されていたナショナル・リーダーズの中で、そうした故郷を追われた人が、巡り来る春に、鳥の囀るのを聞いて、しみじみと故郷を偲ぶ場面がありました。それが少年の胸に訴えたことを覚えています。

米国への移民は、御承知のように、初めは信仰の自由を求めて進んで郷里を離れた連中で、ピュリタンであったが、オーストラリアへ来た連中は、自分の自由意志ではなく、追放されて来た人達でした。然し彼等は自分達の手で新天地の開発をしなければならなかった。オーストラリアでは都市の郊外へ出ると、そうした人々によって造られた開拓地が眼にとまる。濠洲の原住民（アブオリジニーズ）が永年住みついた土地と共に彼等の生活記録が到る処に見られます。

三月二十九日

山村夫妻の御招待で、マデリンさんと御一緒に山村さんの邸内で、バーベキューの御馳走になり、楽しいひと時を過しました。この山村さんのお住居は、所謂社宅であります。実に堂々たる邸宅で、日本の内地でしたら所謂高級住宅で、御主人

はシドニー市内の会社へ車で通勤しておられますが、実に閑静な所でした。帰途は、御主人の車で、ホテルまで送って頂きましたが、途中、すばらしいシドニーの夜景を案内して頂きました。

三月三十日

愈々ハレー彗星の観測地であるクーナブラブランへ向う。シドニーから四百六十キロもある所です。途中、ユーカリ樹によって掩われた起伏する丘陵があり、その間に小さい部落が幾つか点在している。こうした部落を過ぎ、標高一千メートル程の峠を越して観光バスは走る。

この丘陵はユーカリの密林で掩われ、夕日が照り輝くと、そのユーカリが青々と光って見える。それで、この丘陵はブルー・マウンテンと呼ばれている。ブルー・マウンテンに達するまでに幾つかの草原がある。中には立派な柵を施した競馬場があった。ガイドの話で、それは問題のフィリピンの大統領だったマルコス的所有地だと聞いて、思わず、私は「マルコス」じゃない「まあこすい」と思った。ユーカリに掩われた草原には野生のカンガルーがとびはねていた。

クーナバラブランの村に到着。モーターに分宿する。仮眠をとった後、零時から午前三時半まで、第一回の観測を行う。懐中電灯のレンズに赤い紙を貼って極力光を薄めて観測の現場へ向う。一面の草地だが凹凸が甚しく危うく転倒ころひそうになる。

空を仰げば一面の星、天の川が綺麗だ、南十字星や土星が実にあざやかである。

月光のさやかであるのがいささか邪魔だ。月の下方に一段と輝く星がある。これは火星だ。この火星から右の方へ視線を移して行くと、微かに不思議な光を放つ星が見える。それがハレーだ。残念ながら一九一〇年のように明瞭には見えない。然し確かにこの眼でその姿を捉えた。この時思わず、アルキメデスが発見の喜びに叫んだというあの言葉「ユーリカ」(Eureka) エureka「やったぞ」というのだ。

そのとき、また妙な連想をした。それは歌舞伎狂言で有名な『世話情浮名横櫛』の源治店の場面で、故人になった十五世の市村羽左衛門と先代の尾上梅幸及び尾上松助の演じたあの場面だ。蝙蝠安の科白セリふが終って、与三郎が「おしんぞさんえ、おかみさんえ、いやさ、お富、久し振りだなー」というところだ。そのとき、こんな即興詩を作ってみた。「久し振りだね、ハレーさん、もっとお見せよその顔を、平和

のシンボルその微笑、昔はお江戸の源治店、今は昭和のシドニーで」とこんな洒落をとばしながらモーテルに戻り直ぐにベッドへ潜り込んだ。

三月三十一日

クーナバラブラン滞在、朝食後、専用バスで郊外観光、ワランバンブルの自然公園で野生のカンガルーの群を見たり、ミニラントではオーストラリアの開拓民及び原住民が使用した品々が展示してある博物館を見学。

今日また第二回のハレー観測を行う。眼をこらしてこの彗星を見つめに見つめた。そこに設えつけの望遠鏡で見ても大差はない。

四月一日

クーナバラブランで朝食、午前八時三十分専用バスで、二十キロ離れた郊外のオーストラリア国立大学天文台（サイディング・スプリング）へ行き、南半球最大の三・九メートルの天体望遠鏡を見学、帰途シドニーへの途中、マジーで昼食（中華料理）、十七時三十分シドニーのホテル着。

四月二日

ホテルで朝食、午前自由行動、市内でショッピング、マデリンさんとお別れの昼食。

十八時四十五分シドニー発、空路パースへ。パースでは、シェラトン・ホテルという高級ホテルに一泊。

パースはシドニーに劣らぬ美しい都会で、舗道に塵一つないのを市民は誇っている。

四月三日

帰路のカンタス機では、石原慎太郎氏や、竹村健一君が一緒だった。因に竹村氏はパースの目抜き通りで大きなレストランを経営して金儲けに大童の由、ここのお料理はデリシヤスでなく、デリ、トシヤスカ如何は保証どうかの限りではない。

この度、カンタス航空が日航と協力してパースから成田への直通便を開始するので、乗客を歓迎するため特別にアーチを建てたり機内の食事は実に豪華、サーヴィスも満点だった。午後九時成田着。帰宅したのは零時。翌四月四日は老生の誕生日。先ずは万事目出度し。